

酪農とドライブインの町 直別・ミッキーハウスドライブイン

帯広から東は道東と呼ばれるエリアだ。道東の二大都市は釧路と帯広であり、二つを結ぶ幹線道路は国道三八号線である。

この国道三八号線を、帯広から東に走ってゆく。しばらくはホームセンターやドラッグストアなどロードサイド型の店が続くが、十五分も経つと見かけなくなつた。雄大な十勝平野が広がり、ところどころに牧場がある。幕別、豊頃、浦幌と三つの集落を抜けたあたりで、再び風景が変わりだす。樹木が増え、建物は姿を消し、気づけば原野と呼びたくなるような森林の中にいる。最後に信号を見たのはいつだっただろう。そんなことを考えているうちに風景が開け、久しぶりに建物が見えてくる。どうやら店のようなだが、営業している気配はなかつた。中を覗き込むと、メニューの横に「酪農とドライブインの町直別へようこそ」と書かれた貼り紙が見えた。

直別ちよくべつという町には、五軒のドライブインが建ち並んでいる。まさにドライブインの町ではあるのだが、それは少し異様な風景だった。原野を抜けた先に、五軒ものドライブインが——しかも廃墟と化しつつあるドライブインが——密集しているのだ。

この町で今も暖簾を出しているドライブインが一軒だけあった。「ミッキーハウスドライブイン」である。

店に入っても吐く息は白かつた。店主の千葉晃子さんは「北海道は寒いから」と石油ストーブに火を

つけ、ハロゲンヒーターまで用意してくれた。小上がりに座り、鹿焼肉定食を注文すると、鹿肉とキャベツ、漬物、味噌汁に大盛りのごはんが運ばれてきた。これを一人用の焼肉コースターで焼きながら食べてゆく。鹿肉というとクセのある印象があるけれどさっぱりした味だ。

「うちは民宿の許可も取ってあるから、鹿撃ちの人が泊まりにくることもあるんだよ。十月末から十二月の中頃まで獲る。鹿肉はね、血抜きが下手だったら臭くて食べられないよ。でも、ちゃんと血抜きをしたら大丈夫。猟師の人たちはね、獲った鹿を持って帰ってきて、うちの前にドーンと置いとくんだけ。夜になると電気をつけて、そこで解体する。鹿には内口コースって部位があって、獲ってすぐだと生でも食べられるの。今年はあるまり鹿を見ないけど、このあたりでもよく鹿がいるんだよ」

食事をいただいているあいだ、晃子さんはそんな話をしてくれた。このあたりには鹿ばかりでなく、旅行者もよく訪れていたそうだ。「夏になると特に忙しくて、私がお昼ご飯を食べられるのは四時過ぎになるなんてしょっちゅうだったよ」と晃子さんは振り返る。しかし、今はこのドライブインを訪れる客はほとんどいなくなり、僕の他にお客さんが入ってくる気配はなかった。かつてこの店にやってきた旅行者は一体何を目指していたのだろうか？

*

窓の外では再び雪が降り始めている。店の前を横切る国道三八号線をトラックが走り去ると、道路に降り積もった雪が舞い上がる。僕がぼんやり外を眺めているあいだも、晃子さんはせつせつとストーブに薪をくべていた。石油ストーブより薪ストーブのほうが部屋全体が温まるのだという。「こつちのほうが暖かいよ」。晃子さんは僕を薪ストーブのそばに招き、美味しいコーヒーを出してくれた。「いつか喫茶店をやるのが夢だったから、コーヒーの落とし方を習いたくて、新宿の喫茶店で一年半ぐらい働いたこともあるの」と晃子さんは言う。



晃子さんは北海道出身ではなく、神奈川県出身だ。そんな彼女が北海道でドライブインを始めることになったきっかけは、三十二歳の冬にまで遡る。

「その頃、私は池袋の丸物ってデパートで働いてただけど、友達と三人で上野のダンスホールに行くって話になったんだわ。あれはクリスマス晩だね。地下に大きなダンスホールがあったんだけど、そこに入って見たら、ひとりですっと座ってる人がいたの。私の友達が『あんたは踊らないのか』って声をかけたら、『いや、それより俺はコーヒー飲みたいんだわ、この近くに喫茶店があるから行きませんか』って誘われたわけ。それで四人で喫茶店に行って、それからスナックに行つたのかな、とにかくそんな遊びをして、うちのオッサンと知り合つたんだよね」

晃子さんは夫の武雄さんのことを「オッサン」と呼ぶ。やがて結婚した二人は、友人が神奈川で経営していた店を譲り受ける形で焼き肉屋を始める。店は十三年続いた。その焼き肉屋を閉めることになつたのは、武雄さんが突然「親の死に目を看取るから、俺は北海道に帰る」と言い出したからだ。武雄さんの両親はまだ元気に過ごしていたけれど、長男である武雄さんには故郷に残した両親に対する思いがあつたのだろう。

「私は帰るならひとりで帰りなさいと言つただけど、うちのオッサンがそうはいかないって言うんだわ。私の母親には『北海道なんて雪深いとこは人間の住むところじゃない』と反対されたけど、行くって言うんだからしょうがないよね。雪を見せてあげるって言葉に騙されて四十何年、ずっと雪に嵌まっちゃつてる」

武雄さんの実家があるのは浦幌だった。初めて訪れる北海道は、夏は涼しくて快適だったけれど、冬の寒さには辟易した。ストーブに薪をくべながら、晃子さんは「北海道は寒さが違うでしょう」と言う。冬はしばれちゃつて大変だから、本当は逃げ出したい——そう笑う晃子さんの言葉はすっかり北海道の

イントネーションだ。

*

北海道に移住した二人は、一九七四年、帯広で喫茶店を始めた。

当時、北海道の賑わいはピークを迎えていた。一九六一年度に三五万人ほどだった来道観光客数は、一九七四年度には六・七倍の二三七万人に達している。この記録は十二年間破られることはなかった。

一九七四年に大挙して北海道を訪れた観光客は何を目指していたのだろうか？

『旅』という雑誌がある。旅行雑誌の草分け的存在だ。『旅』で最初に北海道特集が組まれるのは、日本が復興期から高度成長期に移行しつつあった一九五五年のこと。タイトルは「新しき北海道」。ここで「新しき」という言葉が使われているのは、戦前から知られた景勝地と差別化するためだろう。戦争の混乱が落ちつくのと、一九三四年に国立公園に指定され、景勝地として名をはせていた阿寒湖には大勢の観光客が押しかけるようになり、当時の週刊誌にはその混雑ぶりが報じられている。せっかく都会の喧騒を離れて北海道の大自然を満喫しようとしてきたのに、見渡す限り人の山で、観光を楽しむどころではなかった。そこで「新しき北海道」が特集されたわけだ。

特集の巻頭には「開拓民の暮し」と題したグラビアが掲載され、干し草を積み上げる様子や切り株の前を歩く農民の姿が紹介されている。続いて武田泰淳「天塩の原野に沈む月」、堀田善衛「さいはての旅」、草野心平「オホーツクの海と日高の海」など、作家たちが紀行文を寄せる。選ばれたのはいずれも秘境と呼びたくなる場所だ。一九五七年には釧路を舞台とした小説『挽歌』が七〇万部のベストセラーとなり、一九六〇年には森繁久弥主演の映画『地の涯に生きるもの』が公開され、これまで光の当てられてこなかった町にも目が向けられるようになってゆく。その時代に生まれたのがカニ族だ。

カニ族とは、周遊券切符を利用し低予算の旅をする若者を指す言葉だ。その多くは横長のキスリング

型のリユツクを背負っており、列車の通路を通るときは横向きで歩かなければならず、その姿から「カニ族」と名づけられた。カニ族向けの宿泊施設もあちこちに生まれたが、一九七一年、その先駆けとなる「カニの家」が帯広に開設された。

「カニの家っていうのがね、駅の横つちよにあったの。そこで自分たちでテント張って泊まるんだわ。あの頃はよくカニ族の子を見かけたけどね。中には住み着いてる子もいたけど、マナーが悪い子もいたから、駅が怒っちゃったこともあるんだよね」

晃子さんの喫茶店は電話局や病院のすぐ近くだったため、カニ族よりは近所で働くお客さんで賑わい、朝から晩まで大忙しだったという。

「コーヒーだけじゃなくて定食やスパゲッティもやったもんだから、結構忙しかったんだわ。朝九時に店を開けて、片づけなんかやってたら帰りも夜遅くなる。しかも、そのうち看護婦さんたちがやってきて、一人一〇〇〇円で一杯飲みをやってくれないかと言ってきたの。うちのオッサンと相談して、『帰りが遅くなると嫌だから、何時までと時間を決めてやろう』って話になったんだけど、そうやって決めたところで時間通りにいかないんだわ。若い女の子たちだから、くっちゃくっちゃしゃべってね、うちに帰る頃には十二時過ぎたりね。喫茶店は三年やって、儲かるのは儲かったんだけど、疲れて嫌になって辞めちゃった」

北海道に移住したあと、晃子さん夫婦は転々と仕事を変えている。何年か働いてお金が貯まると、仕事を辞めて旅に出た。「主人が旅行好きだったから、二人でよく旅行に行ってたよ」と晃子さんは振り返る。カニ族——ではないけれど、晃子さんたちもまた日本全国を旅したのだ。

「少しお金が貯まると『それじゃ行こうか』って店閉めて旅行に出て、お金がなくなると『そろそろ帰ろう』。そんな旅行だったのよ。最初は下田に行つて、黒部にも行つたし京都にも行つた。北海道もほ

とんど全部まわったよ。何日までと決めてないから、旅館の予約もしないんだわ。予約しようとしたらうちのオッサンが『修学旅行じゃあるまいし』って言うからね。でも、能登半島に行ったときに宿が見つからなくて、雨が降ってるから駅前で雨宿りして立ってたのよ。そうしたら男の子がやってきて、僕が探してあげますよと雨の中をあっちこっち探してくれた。結局宿は見つからなかったんだけど、駅前にある昔の旅館を紹介してくれて。そこはもうおばさんひとりしかいなくて、『自分で布団を敷いて、全部自分でやるんらいいよ』って言うの。そうやって旅先で親切にもらったことがあるから、今度は自分たちでも何かできないかって思ったわけ」

当時晃子さんたちが経営していた店はラーメン屋だった。この店は裏通りにあったこともあり、地元客はあまり多くなかったけれど、その代わりにツーリング客がよく訪れていたのだという。当時はもうカニ族は下火になりつつあったが、八〇年代に入ると第二次バイクブームが巻き起こる。鉄道でやってくるのがカニ族だったのに対し、バイクで旅する若者はミツバチ族と呼ばれた。ミツバチ族の目的地として人気だったのもまた北海道である。

「そのときやってたラーメン屋は、二階もあって広かったんだよ。それでライダーハウスを始めることにしたんだわ。最初の頃はうちのオッサンが駅前でチラシを配ってたんだけど、それでも全然来ないわけ。そうしたら知ってる子がね、『おばさん、それやめたほうがいいよ』と言うの。何でかって聞くと、チラシを渡されると『身ぐるみ剥がされるんじゃないか』って思うんだって。当時は皆、ライダーハウスなんかは口コミだったから。それでその子が『俺が行ってくるわ』って出かけていくと、いくらでも連れてくるんだ。いや、あの頃は面白かったわ」

晃子さんと武雄さんの夫婦は、しばらく帯広でラーメン屋兼ライダーハウスを営業していたが、交通事故に遭ったことをきっかけに店を閉じ、一年ほどリハビリをして過ごしていた。そんなある日、義理



の弟から「直別に空いている物件があるみたいだから、そこでドライブインでもやってみないか」と持ちかけられる。そうして始めたのが「ミッキーハウズドライブイン」だった。

*

ドライブインを始めたとき、夫婦は還暦を迎えていた。そのままのんびり老後を過ごそうと思わなかったのかと訊ねると、「人間が貧乏性にできてくるから、何しろ働きたかったわけ」と晃子さんは言う。初めのうちは店名に「ミッキー」とある通りミッキーマウスの看板を出していたけれど、ある日デザインから直々に抗議の電話があり、外すことにしたのだという。

「ミッキーハウズドライブイン」は、今もライダーハウスとして営業を続けている。「体が持たないから」と連泊は断っているけれど、一泊二〇〇〇円であれば宿泊が可能だ。部屋は広々とした和室。流し台とコインランドリーもあり、値段を考えれば十分な設備だ。廊下には額装された写真が飾られており、開店までもないドライブインの前で晃子さんと武雄さんが常連客と一緒にポーズを決めている。

「ここで店を始めて、最初の何年かは一杯だったよ。表にバイクがずらーっと停まっていたもん。女の子も多かったんだよ。『おばさん、私手伝うわ』って洗い物してくれたり、『はい、これ作ったから出しなさい』って運ばせたりね。本当に面白かったもんね。それで、ライダーの子たちは寝袋を持って旅してるとだわ。部屋に入りきれないときは『ここで良いから寝かせてもらえませんか』って言うから、小上がりのところで寝かせたりしてね」

店の本棚には、お客さんが残していった本が並べられている。『特攻の拓』や『BOY』、『よろしくメカドック』といった漫画と一緒に、バイク情報誌やツーリングガイドも並んでいた。

ミツバチ族という言葉が誕生した八〇年代後半には、北海道のツーリングガイドが何冊も出版されている。分厚いガイドブックも多く、安宿の情報もかなり豊富に掲載されている。根室半島の先端、納沙

布岬そばの牧場の中にある民宿。丹頂鶴の飛来する鶴居村にある民宿。太平洋を一望できる民宿。旅情をかき立てられる情報ばかりだ。安く泊まるということを第一に考えるのであれば、帯広や釧路には一〇〇〇円以下で宿泊できる場所がいくつも記載されている。しかし、詳細なツーリングガイドであっても、地図に「直別」と記されているものはほとんど見かけなかった。

直別という集落は音別町と浦幌町にまたがって存在している。音別町が編纂した『音別町史』をひろくと、「観光」の章にこんな記述がある。

当町は十四キロにも及ぶ海岸線をもちながらもその殆どが砂浜で、直接海に落ち込む断崖や奇岩らしきものが一つもない平凡なたたずまいである。目を山陵地に転じて見ても、近郊にはさしたる景勝の地も見当たらず、往時から観光資源に乏しい町として、観光的發展は半ばあきらめられた形で行政が進められてきていた。

町史にしては自虐的な記述だが、確かに観光客が喜びそうなスポットは見当たらない。ツーリングガイドでも空白地帯となっているのに、ミツバチ族はどうして「ミツキーハウスドライブイン」に宿泊しようと思ったのだろうか？

「いや、泊まりに来るつちゆうより、食事に来てたのよ」と息子さんは言う。「襟裳岬からずうつと走っていると、昔は道沿いに何もなかったんだわ。十人ぐらいのライダーの子が一緒に来ることもあったよ。その子たちにご飯食べさせてるあいだ、今晚はどこに泊まるのかって聞くと、ライダーハウスに泊まるつもりだって言うわけ。予約せずに旅行してる子も多かったから、『うちもライダーハウスやってみよ』って言うよ『じゃあ泊まらせてください』と言われたりね。それで常連になった子もいたよ。帯

広でライダーハウスやってたときも、葉書を送ってきってくれる子がいたんだわ。そういう子には、こっちに店を移るときに手紙を書いて知らせてたね」

「ミッキーハウスドライブイン」がオープンした一九八六年には、来道観光客数が十二年ぶりに更新されている。日本はバブルに突入し、海外旅行も一般的になりつつあった。そんな時代に北海道を訪れたミツバチ族は、かつてのカニ族のように秘境を求めて北海道を訪れたわけではないだろう。秘境を探すのであれば、世界の果てまで旅することだって出来る。ミツバチ族が求めていたのは、旅先で出会った人たちとの触れ合いだったのではないか。

「うちのオッサンは話好きだから、夜遅くまでライダーの子たちとしゃべってたよ」と晃子さんは振り返る。「私も入ってね、お酒を飲んで毎晩騒いだり、冗談言って笑ったりして。ギターを積んで走って、そのギターを弾いてる子もいたよ。あの頃は面白かったね」

*

そんなミツバチ族も、今ではほとんど見かけなくなってしまった。晃子さんが言うには、二〇一六年の夏はわずか三組ほどこしか宿泊客がいなかったそうだ。

最初に「ミッキーハウスドライブイン」を訪れた二〇一一年、晃子さんは「義弟は『もう店を閉めて帯広に引越せ』と言うんだけど、こうやって仕事してたほうがボケ防止になるから、健康のために続けるつもり」と笑っていた。夫の武雄さんは二〇〇五年に亡くなり、同じ時期に周りのドライブインが店をたたんでしまっただけから、晃子さんは十年以上ひとりで店を続けてきた。

「店を始めたばかりの頃はね、別のドライブインのばあさんが怒鳴ってきてたのよ。『あんたたちが来たせいでうちはお客さんが来なくなっちゃった、新参者が泥棒して!』って。そのばあさんも亡くなっちゃったけど、あの頃はもうドライブインは下火だったと思うよ。ここで店を始める前にね、うちのオッサン

が音別の銀行で話をしてたの。そしたらヨソのじいさんがきて、『見たことない顔だけど、アンタはどこにいるんだ』って言われたらしいんだわ。そこでドライブインをやるつもりですと伝えたら、『今更あんなどこでドライブインやってどうするんだ、皆が儲けた残りかすじゃないか』って言われたんだって」

では、皆がドライブインで儲けた時期とはいつなのか——答えは図書館に眠る小さな資料の中にあつた。資料というのは、直別小学校の記念誌である。そこには町史にも残されていなかった直別の人々の生活が書き残されていた。

直別の歴史は、一八九〇年、渡船場経営のため高嶋文吉が直別に入植したことに始まる。以来、林業と農業を中心に生活が営まれてきたが、山資源の枯渇により木工場は閉鎖され、寒冷地の厳しさから離農者が続出し、戦後は人口が減少してゆく。そんな直別に転機をもたらしたのが国道三八号線の開通だ。全面的に舗装された道路が完成すると、交通量は大幅に増えることになる。

そこに目をつけたのは平田力男という人物だ。一九七〇年六月、平田力男は国道三八号線沿いに「ドライブイン北海」をオープンさせる。これが直別で最初のドライブインだ。

開店当初の「北海」を今に伝える資料は残っていないけれど、爆発的に繁盛したことは間違いないだろう。というのも、一九七二年十一月、平田力男さんは「北海」からわずか一〇〇メートルの場所に二軒目となる「ドライブインおおぞら」を、一九七八年には三軒目の「ドライブインキャラバン」もオープンさせている。平田力男さんの店が繁盛する様子を目の当たりにして、一九七二年七月に「ドライブイン美樹」が、一九七三年七月には「ドライブイン旭」が営業を始めている。こうして直別は酪農とドライブインの町に生まれ変わったのである。

*



晃子さんは少し横になって休むというので、店に荷物を残したまま散歩に出ることにした。

粉雪が降り積もる中、国道三八号線沿いを歩く。長靴を履いてこなかったことを少し後悔する。歩道は片側にしかなく、大型トラックが通るとおそろしいなど心配していたけれど、車はほとんど通らなかった。以前はそれなりに交通量があつたはずだが、二〇一五年に新しい道路が完成したことで、国道三八号線の交通量は激減したのだ。

直別に暮らす人も随分少なくなった。かつて存在した小学校は一九八〇年頃に閉校となり、「ミツキーハウズドライブイン」以外の店は廃墟と化しつつある。静かな風景の前に、晃子さんの言葉を思い出す。

「誰かドライブインをやりたい人がいたら、紹介して欲しいんだわ」

晃子さんにそう相談されたとき、僕は何も答えることができなかった。あの言葉にどう返答するのがふさわしかったのだろう。立ち止まって考え込んでいると久しぶりに大型トラックが通りかかった。トラックは雪を散らして走り去り、また無音の世界が訪れる。